

第1780回(3月30日)

研究叢書『中山間の定住条件と 地域政策』をめぐる

水野正己

1. 田畑保編著『中山間の定住条件と地域政策』(農業総合研究所研究叢書第121号, 1999年2月)は, 現下の日本農業をめぐる最大の問題のひとつであり, また農業政策においても最大の課題のひとつになっている中山間地域問題を取り扱ったものである。本書の特徴は, 「人」に着目した定住条件の解明, 生産から生活までの幅広い中山間地域問題群への多方面からの接近, EU主要国の関連政策の分析を取り込んだ国際比較の視点の追求, という3点に求められる。

2. 本書は, 序章および3部11章(ふたつの補論を含む)の構成である。本書の全体的な課題は, 「現在緊急の課題となっている中山間地域政策, 定住対策のあり方に関して中山間地域の実態に即して可能な限り総合的な検討を加え, 今後の課題や方向を明らかにすることである」とされる。主要な結論として, つぎの3点をあげている。

① 農林業の生産条件不利対策としての中山間地域政策については, 日本の中山間地域の現実, そこでの農業構造特質に即して, 何らかのかたちで農業生産と結びついた直接所得支払いという意味での日本型ともいえるべき直接所得支払政策が基本となること。

② 条件不利対策と同時に, 中山間地域の実態に即した地域維持政策, 定住対策の充実, 強化の必要性。

③ 地域政策の課題, 展開の地域的多様性と地域政策の取り組みにおける地域住民, 関係機関の主体的・組織的努力を重視することの必要性。

3. 本書を読み終えて, さらに疑問になった点を指摘しておきたい。

①「定住」をどのように捉えるのか。現住

人口のみを対象にして, これ以上の減少・流出を食い止めようとするのか, それとも地域に新たに人口を引き入れることまでを視野に入れて考えるのか。さらに, 定住促進の客観的条件に対して, 定住者の主体的条件をどのように捉えるのか。

② 中山間地域政策としての「日本型直接所得補償政策」が万能策でない限り, どのような目的に対して, どの程度に有効と考えられるのかを明らかにする必要があるのではないかな。

③ 「過疎問題」から「中山間地域問題」への問題状況の転換が, いかなる問題把握のパラダイム・シフトに依拠しているのか。前者が人口論的視点に立っており, 後者が条件不利地域農業論的視点に立っていることから, 両者は同一問題の異なる側面を捉えたものとされるが, そこには時代性を映した問題把握の視座の違いがあるとみられる。すなわち, 従来の過疎問題論が, 「山村人口減少は当然, 過疎は開発の遅れ・不足が原因, 豊かな都市を指向する近代化論的山村振興策が必要」という山村観に立っていたのに対して, 中山間地域問題の段階には, 「市場経済や私経済的合理性の限界, 地域社会の崩壊に対して中山間地域の維持保全が不可欠, 都市社会の矛盾」といった農山村観に立つものとみられるが, どうであろうか。